山と博物館

第40巻 第6号 1995年6月25日 大町山岳博物館

上空から見た大町市

上空から見えた都市の表情

扇田 孝之

僕は空港周辺の風景を機上から眺めるのが好きだ。地上にいる時以上にその都市（国）の雰囲気が伝わってくることがあるからだ。

ヨーロッパから帰って来ると、飛行機は新潟上空で一段と高度を下げる。大小の河が蛇行し、人間の存在がまったく感じられないタイガ地帯に慣らされた目には、人の匂いが漂う箱庭のような山里の眺望にホッとする。時には、遠くに霞む北アルプスの山並が風趣を添えてくれる。

しかし、飛行機が着陸態勢にはいり、どんどん高度を下げるにしたがって、僕はいつもある苛立ちを憶えるのだ。

一度は住んでみたい都市として全米一の人気を誇るシアトル、溢れる緑に包まれ、広く区画された住宅が眼下に続く。石油の町・カルガリーは、大平原のなかにむきだしの工場群が点在する中で、高層ビルのダウンタウンが一点、目につく。海の輝き、大地を埋め尽くす森が眩しいバンクーバー。

アムステルダムは、あの独特の赤茶けたレンガの家が整然と並び、おとぎ話にでてくる街を連想させる。ジュネーブ、チューリッヒ、パリ、ロンドン……、それぞれに特有の顔がある。そして、どこの都市にも共通して見えたのが、公園を中心にして点在する陸上競技場、サッカー場（米国ではそれに野球場が加わる）等の市民のための施設であった。

翻って、成田空港の周辺。土色に濁った霞ケ浦と利根川河口付近、そして、緑の山を切り崩し、点々と続くゴルフ場が飛行機の旋回に従って右に左に見え隠れする。十七で数えるのをやめたことがあった。

普通の市民が憩う施設がまるで見えない日本の玄関・成田の光景は異型である。国際化の波のなかで各種の大型開発が急ピッチで進んでいる信州は、どのような表情をしているのだろうか。

（地域社会研究家）

花よ光よ風達よ

忰田輝昭

早春……、三月になると山の天気は落ち着き、晴天の日が続くようになる。カメラと三脚をザックに詰めて、スキーにシールをつける。森の中を直登したり、急斜面をトラバースしながら樹林帯を行くと、そこは静寂の世界、大自然そのものの世界が広がりその中へ溶け込むようである。

早春の陽光を浴びる森は、森林特有のやわらかな匂いを風が運び、森の中に居ると、身体にしみついた都会の匂いを吸収していく。

ブナの原生林やアオモリトドマツ、ダケカンバなどが雪面に力強く影の模様を描き、白一色の世界に美しい被写体を創り出す。

また、動物の足跡の数も多くなり、鳥達の明るいさえずりに春の気配を感じる。しかし白い稜線や頂上での早朝や、日没の撮影はまだ寒く厳しい。

霞立つ剣沢雪渓　長縄昭夫

春……、尾瀬の鳩待峠、山靴のヒモを締め直し、時折風の音を聴きながら残雪を踏み締め、樹林帯を下っていくと、ほどなく上田代である。春には水芭蕉、初夏にはニッコウキスゲ、アヤメなどが咲き乱れる。至仏(しぶつ)や燧(ひうち)ケ岳から吹き下ろす風が、緑新しい樹林や植物を揺すり、陽焼けした膚身にとても心地よい。

水芭蕉や黄色のリュウキンカの群生を見つめていると、どんな花でも自然環境のバランス環境さえ良ければ厳しい冬を耐え抜き、春には必ず芽を出し花を咲かせるのだと思う。

初夏……、つい先程まで初夏の日差しが眩しく栂池の池塘がキラキラと輝いていたが、ふと空を見上げると雲が少しずつ増えて鉛色に変わっていた。雲の流れ、風の音からしてやがては雨が降り、雷がくるだろうと判断したとき、突然目の前を閃光が走り、一センチ大のヒョウがバラバラと降ってきた。二回目の雷鳴のすさまじさには一瞬飛び上がってしまった。

同心燃ゆる　忰田輝昭

夏……、乗鞍高原のせせらぎの音も明るくなり、白樺の幹や葉が一際美しくなる頃、山々は本格的な夏となる。東々の山々や北アルプスなどでは賑いを見せ、私達も被写体を求めていくのである。高山植物も華麗な花を咲かせ、心地良い風に揺れ私達に語りかけます。

バンダナを頭に巻いてあえぎながら登る山道、チングルマの群生に足を止め、フィルターワークに時を忘れ、撮影に夢中となる。

初秋……、黄色のマルバダケブキや赤紫色のヤナギランなどの花を残し、秋へと変貌する。点在する高原の池塘の水面に見え隠れする雲に、ふと青空を見上げると、渡り鳥が遠い彼方へ飛ぶように白い雲が山の向こうへ

カタクリ　須崎安次

北岳荘厳　布施彰

次々と去っていく。池塘を渡ってくる風が哀愁のとりまく歌声のように私にささやく。

華々しい夏も過ぎた今、やがて山から紅葉がおり、さわやかな風を送ってくれたあのダケカンバを包むでしょう。そして貴方の足もとに落ち葉が舞い、夏の日の思い出を被い隠します。でも私は忘れない、貴方のあの笑顔を。

秋……、青い空に広がる黄色のカラマツ、足をとめて思わず立ちつくす素晴らしい紅葉、逆光に映え輝く紅葉、静寂な世界の凜(リン)とした空気、ファインダーをのぞきながら息をとめる。シャッター音が森の中に吸い込まれて行く。山の神秘的な装いに私達の心までが染まるようだ。

梅薫る　山川弘美

初夏の沼　戸部とし子

秋から冬へ……、山小屋での朝、ガラス窓を開けると、あたり一面雪化粧していた。十一月の山々では、雪が二度、三度と薄積りをしてついには根雪となるのである。

もうこの頃には、たいていの樹木はすっかり葉を落とし、長く厳しい冬に立ち向かうのである。ハイカー達の数も少なく、山小屋での夜は山を本当に愛する人達の語らいの場となる。山や写真の話、また人生経験の豊富な人からの体験談などは楽しく、時には腹をかかえるほどの面白さに、本当に来てよかった、と思うのもこの頃の撮影山行である。

冬……、厳しい寒さに目を覚まし、テントを出ると、白々と明け行く満天の星空であった。歓声をあげながらカメラを担ぎ、再び山頂を目指した。

森が凍りつき、氷の結晶がとても美しい。そして、谷から沸きあがる雲や白い峰々、目にすることの全てが陽光に赤く燃える様に輝き、神々の大地、大自然の壮大なる感動のドラマ、その出会いの瞬間の素晴らしさに私達がシャッターを切る度に橙色、黄色と変わり、ファインダーを通して、心は大自然と一体となるのである。

（フォトサークル風の詩展示会代表）

道　杉浦圭吾

白い朝　大石陽子

冬のせせらぎ　佐々木敬叔

コアジサシの繁殖とつがい外交尾

鳥羽悦男

コアジサシの雌は、産卵の前日くらいになると、地上の巣にうずくまっている時間が長くなる。そして、巣の中かその周辺で雄からの給餌を受ける。産卵期には卵形成のために餌がたくさん必要である。そのため、雄からの給餌は雌にとって大切なプレゼントだ。

また雄にとって雌を自分に引きつけ。他の雄にとられないようにするために、給餌は意義があるのだろう。

産卵数はふつう二～三個で、一卵目からすぐに抱卵を始める。このころも、雄から雌への給餌は、頻繁に続けられる。魚が大きすぎてなかなか飲み込めず、やっとの思いで飲み込んでも、尾びれがまだ嘴からのぞいている雌の姿が観察されることもある。

抱卵は、一九～二一日間・約三週間にわたって行われる。抱卵時間は、雄のほうが雌より短いが、雄の抱卵はその後半になって増えていく、逆に雄の雌への給餌は次第に減少し、ふつう抱卵の後半にはほとんど見られなくなる。

雛が孵化すると、雄は今度は雛への給餌を開始する。雌は、自分で餌を捕らえて雛に与えることもあるが、そばで雛を見守っていることのほうが多い。雛は一カ月ほどすると、翼の羽が伸びて少しずつ飛ぶことができるようになり、水辺でしきりに枯れ枝や小石などをつつくようになる。おそらく、自分で餌をとるつもりでいるのだろう。しかし、まだそれは無理で、しばらくは親鳥からの給餌を受けなければならない。

このような、つがいの繁殖の営みの一方で、つがい以外の雌雄の間では、餌をめぐる奇妙な行動が見られる。一部のコアジサシの間で、「つがい外交尾」が生じているのである。

その際、雄はつがい以外の雌に交尾を迫るために餌を運んでくる。雌は雄が近づくと、自分の夫との交尾の前と同じ動作をする。つまり、頭から尾までを平にし、翼を背中の高さにまでに上げて小刻みに震わせるのである。すると雄は、雌の翼に触れるくらいにまで接近する。そして二分くらいたつと、雌の背に乗り、交尾しようとする。

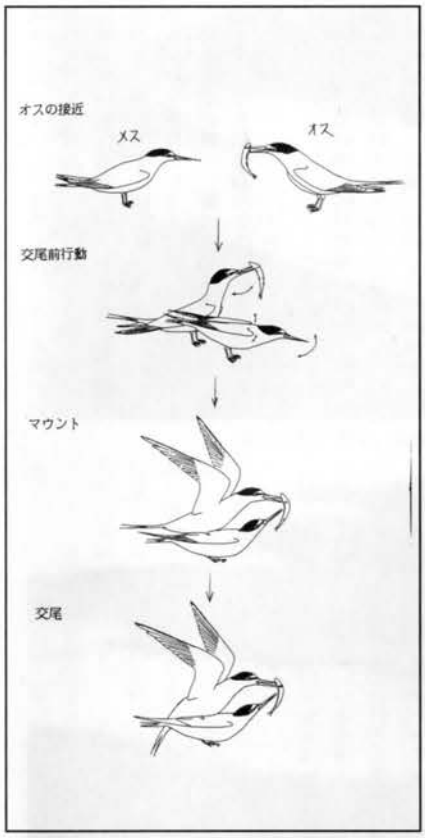
ところが雌は、交尾の前に雄が持参した餌を奪い取ってしまうことが多いのである。雌は、自分の頭のすぐ上にある餌を奪いとったり、雄が背に乗るときに落とした餌を素早く拾ったりする。そのため雄は、雌に餌は与えたものの、肝心の交尾はできずじまいで立ち去るしかない。

交尾前の動作を雌が始めると、雄はそれに誘われて雌に触れるくらいにまで近づくが、雌はその瞬間を狙って雄のくわえている餌に飛びつき、それをかすめ取ることもするのである。一回でうまく相手の小魚を奪うことができたこともあるが、十一回も飛びついてようやく奪うことができた観察例もある。雄は、雌に飛びつかれながらも、必死に雌の背中に乗ろうとして、交尾にチャレンジしていた。

また、ただ地面に伏せたような姿勢から、いきなり飛びついて餌を取る行動も見られた。雌がからだを低くするのは、雄の求愛を受け入れ、交尾に誘う意味があるのだろう。

雌は、抱卵期間の後半から、夫からもらう餌が少なくなる。また夫の抱卵時間が増えるため、巣から離れる時間が多くなる。その時間中に十分な餌を自分でとれればよいが、そうでないと空腹になる。そんなとき、餌を持って雄が近づいてくれば、それが欲しくなるのは当然であろう。

（梓川村立梓川中学校教諭）



つがい外交尾が行われる過程

ヒナへの給餌

交尾中の雌雄

山と博物館第40巻第6号
一九九五年六月二十五日発行
発行所　〒398長野県大町市　TEL㊗〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三一九三